

## 元和二年(1616)仙台地震の津波被害をめぐって

蝦名裕一(東北大学災害科学国際研究所)

### §1. はじめに

元和二年七月二十八日(西暦 1616 年 9 月 9 日、ユリウス暦 8 月 30 日)に発生した地震について、『譜牒余録』や『貞山公治家記録』などでは巳下刻(午前 11 時頃)に仙台城の石垣・櫓などが破損する被害があり、『イギリス商館長日記』にも、同日江戸においても午後 3 時ごろに激しい地震(exceeding earthquake)があったとしている。この地震の津波被害について、『日本被害津波総覧[第2版]』(1998)は松島寒風沢における津波被害があったとする一方、『日本被害地震津波総覧 599-2012』(2013)では「津波をとまなう？」と疑問を示している。また、大槌地方の史料『大槌古館由来記』には、津波発生年を元和二年(1616)としているが、『新収日本地震史料 第2巻』(1982)や蝦名 2013 はこれを慶長十六年(1611)の慶長奥州地震津波の記述と取り扱う一方、原田ほか(2019、日本地球惑星科学連合大会予稿)では、この記述も含めて元和地震の再検討の必要性を述べている。

本報告では、この元和二年(1616)の仙台地震について、史料における年代の記述の問題と、これをめぐる研究動向から、特に津波被害の実在性を検討していく。

### §2. 大槌地方の史料にみる元和二年の地震・津波と既往研究における取り扱いについて

大槌地方の史料『大槌古今代伝記』、『大槌諸記録集』、『大槌古館由来記』などでは、元和二年十月二十八日に地震・津波が発生、大槌では市日であったために溺死する者が多かった事や、「明神下」(小槌明神)までの浸水があったと記している。しかし、この内容は山田町武藤家の『武藤六右衛門所蔵文書』にも、慶長十六年の地震・津波による出来事としてほぼ同じ内容が記されている。また、『大槌古今代伝記』は、元和三年(1617)の藩主南部利直の閉伊郡巡行について記しているが、宮古地方の史料『小本家記録』などではこれを元和元年(1615)の出来事として記している。これは、南部利直が閉伊郡巡行の際にもうけた子供が後の盛岡藩 4 代藩主南部重信となり、その生年は元和二年(1616)とされていることから、巡行の年代は元和元年(1615)と特定しうる。つまり、『大槌古館由来記』における地震・津波の記述は、年代こそ誤っているものの、慶長十六年(1611)の慶長奥州地震津波の事と特定できる。

大槌地方の史料における年代の誤記が、後の研究に少なからぬ影響を与えている。『宮城県海嘯誌』(1903)は、「海嘯の歴史」として慶長十六年の地震・

津波とは別に、「一、後水尾天皇元和二年陸中の沿岸大津浪あり(宮古測候所調)」と記している。一方、『大日本地震史料』(1904)は『譜牒余録』をあげ、「七月二十七日丁酉、陸前国仙臺、地強ク震ヒ、城壁樓櫓毀損セリ」とあり、仙台地震における津波の存在は記していない。これが、『宮城県昭和震嘯誌』(1935)において「元和二年七月二十八日三陸地方強震後大津波あり」と、仙台地震と三陸の津波被害が混同され、『増訂大日本地震史料』(1941)は『宮城県昭和海嘯誌』が史料に加えられ、この地震について「津浪ヲ伴フ」とされるようになった。以後、今村明恒(1949)、宇佐美(1966)、渡辺(1968)による地震や津波の年代表では、元和二年仙台地震には津波発生したこととして取り扱われるようになったのである。

### §3. 仙台藩領における津波の発生について

さて、仙台藩領寒風沢島において元和二年に津波が発生したとする根拠となっているのは『新収日本地震史料続補遺』(1993)に収録される浦戸公民会『浦戸の今昔(三)』(1980)である。ここには、当時寒風沢島鹿倉村で津波により十二戸が全滅、元和二年に同地に移住してきた長南一族がこれを供養したという伝承が記されている。なお、これと全く同内容の文章が、中村就一 1971 年に脱稿した『長南氏の研究』(1987)に掲載されている。中村 1987 によると、鹿倉村が滅亡した津波については永禄年間という記録があるが、これに筆者が津波年代表などから分析を加え、元和 2 年の「金華山沖地震がもっともそれらしく思える。」としている。さらに、永禄年間の津波に関して、中村 1987 は典拠を「土井謙太郎のノート」としている。これは元浦戸村村長・土井謙太郎の著作であり、その内容は『塩竈市史 VI 資料編 II』(1985)に「浦戸郷土誌」として収録されている。ここでは鹿倉村について「永禄年間に大海嘯があつて、民家の大半流亡して今の地に移つたといふ」と記されている。つまり、寒風沢島の津波伝承は、当初は永禄年間と語られていたものが、後年長南氏の移住と結びつけられ、元和二年の津波被害として読み替えられたのである。

### §4. まとめ

以上から、大槌地域の史料における元和二年の津波発生年は、慶長十六年の誤りであり、それが後の研究の過程で仙台地震と結びつけられたものであることが判明した。すなわち、元和二年仙台地震における津波の存在を記した明確な史料は存在せず、少なくとも津波被害は存在しなかったとみるべきであろう。